



ノマド



川崎ゆきお

「増田さんは喫茶店で仕事をするのですか」

「はい、部屋ではしません」

「確かご自宅がオフィスだと聞きましたが」

「ああ、だから、喫茶店でも同じなのですよ。パソコンやスマホがあれば」

「いわゆる、あれですねえ」

言葉が出ないらしい。忘れたのだ。

「えーと、何て言ったかなあ、サーカスじゃないし、さすらい人ではないし、旅芸人でもないし」

増田は、すぐにその言葉を言おうとしたが、こちらもど忘れした。使ったことなど一度もないからだ。

「あれですよ。あれ」増田が言う。

「そうそう、あれですよ。あれ、モニターじゃなく、幌馬車でもなく」

「常に移動している種族のような奴でしょ」

「サポーターでもないし、増田さんも思いだしてくださいよ」

「ヒッピーじゃなく」

「そう、そうじゃなく、もっと素朴な民族的なものか、職種かなあ」

「山の民とか」

「いやいや、そうじゃなく」

「分かっていますよ。出てこないのです」

「だから、増田さんのことですよ」

「決まった場所で、仕事をしないで、オフィスを構えなかったり、会社の外で仕事をするような感じの」

「それぞれ、特にフリーの人がやっているような感じで。これも増田さんそのものなんですが」

「昔からいましたからねえ、ただの個人事業主でいいんじゃないですか」

「喫茶店なんかで、仕事して、また、別の場所へ移動したりして、そこでも、またパソコンなんかを開いてメールを書いたり、調べものも、その場でやったりとか」

「はいはい、やっています。ああ。思い出しました。ジプシーです」

「え、ジプシー」

「ジプシーでしょ」

「いや増田さん、違うと思いますよ」

「ジプシーじゃないですか」

「近いと思いますが、それじゃない」

「普段使わないですからねえ、たまに聞くことはありますが」

「ヤンキーでもないし」

「ノルマじゃないですねえ」

「違います」

「ノルマンディーかも」

「上陸作戦ですね」

「ノマドだ」

「ああ、ノマドだ」

「やっと思い出しましたよ。ノマドですよ」

「でも、その言葉、もう遠くへ行ったんじゃないですか」

「そのようですねえ」

了